趣旨説明

山影　進

ちょうど1ヶ月ほど前の12月中旬、バンコクで東南アジアの7カ国の首脳が集まり、2000年までに東南アジア10カ国を一つの共同体としてまとめあげるという華々しい宣言をした。大国の草刈り場として19世紀、20世紀を歩んできた東南アジアが、ようやく自信を持って自らの声を大きくあげるような時期が来たのだという感慨がある。だが見方を変えると、これはあくまで国民国家としてまとまった東南アジアが、国民国家をブロックとして、また一つにまとまろうという動きなのだろう。世界全体で見れば、国民国家という枠自体が果たして確固たるものなのだろうかと考えさせる事例が多く見られるようになった。生態から見ても、東南アジアを一つにまとめること自体には様々な無理がある。では、我々が「東南アジア」と語るとき、その言葉にどういうイメージを持っているのか。あるいは「東南アジア」と言いながら、いったい我々は何を見ているのか。地域研究の一つの舞台として、我々が「東南アジア」というものを考える、その正当性とは何なのだろうということを考え続けているのだが、その一つの通過点として今回のシンポジウムがあるのではないか。

このシンポジウムは「外文明と内世界」という大きなグループと、「地域連関の論理」というもう一つのグループの共同企画となっている。この二つのグループは、東南アジアそのものを見るというより、東南アジアの周りから、あるいは東南アジアに覆い被さるものを念頭に置きながら、「東南アジア」を考えるところに共通点を持っている。東南アジアの外側の要素を我々が意識的に考えたときに、東南アジアはどう捉えられるのか。そして外側から東南アジアに働きかける力、東南アジアの方から外側に働きかける力を考え合わせ、東南アジアをダイナミックな歴史の中においてみたとき、いったいどういうことが言えるのか。この二日間のシンポジウムでは、このようなことを考える契機となることを願っている。

平成７年度末シンポジウムは、「東南アジア世界の形成と地域関連の論理」をテーマとしている。われわれの関心はもちろん東南アジアにある。しかし東南アジアだけを見ていては東南アジアは分からないのではないか、という疑問を敢えて掲げて、視点を一歩も二歩も退いてみようとしているのが今回のテーマである。

もっとも、外界の様々な要素を考慮して多角的に「地域関連」を捉えると統一された東南アジア世界の実体がはっきりしてくると想定しているのではない。東南アジア像は相変わらず多様なままだろう。しかし東南アジアは象のようなものではない。実体ではなく関係なのだ。関係としての東南アジア世界の世界を様々な角度から論じてみようと言うのが今回のシンポジウムを企画した狙いである。

シンポジウムは、戦前から戦後、そして今日に至る時間軸と構造的な要因とを掛け合わせて、プログラムが組み合わされている。２日間を通じて、できるだけ多様な東南アジアを描き出すと同時に、東南アジアが東南アジアとして認識され、存在する関係性を動的に明らかにできたら、大成功である。

News Letter 1995年12月15日 №41号より抜粋。